

書記行為の再現系としてのテキストアーカイブズ

白須裕之

概要

P. Shillingsburg は資料の電子的な再現の問題点と可能性を議論するために、「書記行為理論」を提出している。「書記行為」とは、作品の著述、読者の解釈、更にその途中にある印刷や編集のような複製行為を含む、テキストの生成に関わるあらゆる行為を言う。しかし、「書記行為」を統一的に扱う枠組みについては述べていない。本稿はテキストアーカイブズを「書記行為」の再現系として捉えるために、その統一的な枠組みを模索する。「アーカイブズは記号体系である」という提唱に対し、言語の特殊性の故に、既に出来上がったテキストを再現する体系のみではなく、テキストを生成する過程を含めたモデル化を提唱する。

On Text Archives as Representations of Script Acts

SHIRASU Hiroyuki

Abstract

P. Shillingsburg presented a theory of *script acts* in order to discuss potentials for electronic representations of literary texts. *Script acts* are the processes of producing texts, which contain composition, interpretation, revision and distribution of them. But he did not consider formalization of *script acts*. The aim of this paper is to present a consistent framework which models representations of *script acts* by considering ontological foundation of language. In order to discuss this framework, we explore application of MAEDA Hideki's model to written language, which suggested by Saussure and Bergson.

1 はじめに

昨今、電子書籍や電子出版に対する社会的なインパクトについて議論する機会が増えているが、文献の電子化が原理的に何を意味しているかについての議論は少ないように思う。例えば、以下のような素朴な疑問について、その答えを我々は持っているだろうか？

1. 電子書籍はテキストの何を再現しているのか？
2. 電子書籍において編集の果す役割とは？
3. 意味について触れずに、言葉だけを再現できるのか？

電子書籍が再現しようとしているテキストを、我々はどうのようなものであると了解しているであろうか？この点が明らかにしなければ、電子書籍の可能性や意義を議論することはできないであろう。ここでテキストと言っているのは、それを哲学的にきちんと措定しようという訳ではない。この不可解なテキストというものの再現から何を了解しようとしているのが明らかになれば良い。

例えば、文献の電子化はその文献が表現しようとしている意味が分かれば良いのか、小説ならその筋や物語りが分かれば良いのか、文献の電子化はテキストの

字面(統語論的な面)だけを再現すれば良いのか、意味についてはどうか。或いは文献の書誌学的な面まで再現する必要があるのか。文献が元々持っていた媒体の物理的な性質まで再現する必要があるのか、或いはその物理的な情報を保持すれば良いのか、等々。

このように場合場合に依じて、個々に網羅的に議論するのであれば、テキストアーカイブズの基礎理論たりえないであろう。こういった見解と独立にテキストを議論する手立てがないのか、ここにテキストアーカイブズの基礎理論を構築する意味がある。本稿はこのような問題に答えるとともに、言語テキストについてのデジタルアーカイブズの可能性を、意味論的に議論することを目的とする。

文献[14]では、「文献に基づく知識の土台となる資料を電子的に再現/表象する際の問題点と可能性」を議論するために、テキスト生成に関わるあらゆる行為を扱う「書記行為理論」を提出している。本稿では、言語表現を媒介とした理解の可能性という視点から、「書記行為理論」を意味論的に検討し、「書記行為の再現系」(文献[14]で述べる「書記行為」を再現するナレッジサイト、或いはデジタルアーカイブズ)が何如にして可能であるかを議論する。

2 書記行為理論

ここでは文献 [14] で提出された「書記行為理論」と、その「書記行為」を再現するナレッジサイトについて、本稿の議論に必要な範囲で述べる。

書記行為理論は発話行為理論からの類推で発想されたものであるが、発話行為に比べて、書記行為は書記に関するより包括的な行為を含んでいる。書記行為は作品の著述、読者の解釈を含むのみならず、その途中にある印刷や編集のような複製行為を含む、テキストの生成に関わるあらゆる行為を言う。

書記行為という言葉で私が意味するのは、たんに文字の羅列を書いたり、生み出したということに含まれる行為ではない。...書かれたテキストや印刷されたテキストに関連して行われる行為すべて、あらゆる複製行為、あらゆる読みの行為まで含めたすべての種類の行為である。(文献 [14] 邦訳 49 頁)。

文献 [14] では、通常の読者は書かれた言葉だけを読むように訓練されていて、書かれたテキストの解釈を何らかの一貫した文脈のもとで行ない、テキストが生成された様々な書記行為を無視していると指摘する。この書記行為のなかで言わずに済ませられている要素にアクセスするためには、それを克服するためのナレッジサイト構築の必要性を説いている。しかし、文献 [14] における書記行為理論では、書記行為に関わる雑多な事象を述べるだけで、その理論的な定式化がなされていない。また、ナレッジサイトが提供可能な資料、ツール、関係性等が列挙されているだけで、それらのデータの処理の仕方はユーザインターフェースの作成に任されていて、それをどのように統一的に提供すべきなのかの枠組みが存在しない。本稿は書記行為をどのように定式化すべきかというところから始めよう。

かつて言語哲学が、言明或いは記述の道具という面から言語を考察したのに対して、言語行為論は言語行為に注目し、言語をその使用の面から理解しようとした。「書記行為の再現系」を原理的に可能なものに仕上げるためには、書記行為の理解とその記述が欠かせないであろう。本稿では言語行為論との親和性を考慮して、始めに状況意味論的なアプローチを試みる。

¹詳細については、例えば文献 [8] を参照。

3 書記行為の状況意味論

状況意味論は 1980 年代に開発された意味論¹で、自然言語表現の意味を状況間の関係として提出する。例えば、発話の意味を状況意味論では、以下のように定式化する。文 φ が発話された状況を u とし、この発話によって記述される状況を e とする。そのとき、文 φ の意味 $\llbracket \varphi \rrbracket$ は、二つの状況 u と e との関係 $u \llbracket \varphi \rrbracket e$ で記述される。談話の状況に対して言語が課す制約は、従来、言語行為や話し手の意図などを扱う語用論の準備範囲とされたが、状況を扱うことによって、意味論の研究課題とすることができる。

書記行為理論ではテキストを二つに分ける。語彙テキストと書誌テキストで、この二種のテキストは以下のような性質を持つ。

テキストの語彙的な部分、サールの用語でいえばテキストの「文」にあたる部分は、反復の際に間違いを被るとしても反復可能だということができる。だが書記行為としては、テキストは反復できない。なぜなら、書記行為とは、サールの用語でいう「発話」のように「行為者の置かれた文脈に依存した行為」だからである。(文献 [14] 邦訳 12 頁)。

書記行為の行為者を a 、解釈者を i とすると、解釈者に向けられた記号表現 Φ (書記行為に依存して、語彙テキストであったり、語彙テキストへの操作であったりする) の意味を、状況の間の関係によって記述する。

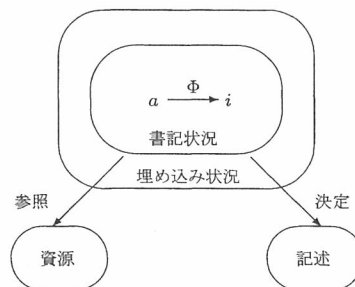


図 1. 書記行為に関わる状況

文献 [3] では、文字に対する状況意味論のスケッチを与えた。文字の意味論は、文字に関連する書記行為、即ち文字の同定や異同に関する書記行為の記述として読む方が適切である。書記行為に関わる状況の理論を構築することは、書記行為理論の課題である。

4 テクストアーカイブズ再考

本節では、テキストアーカイブズを書記行為の再現系と見做すことについて、どのような問題があるのかを議論する。

4.1 書記行為の再現系とは？

まず前節の状況意味論の枠組みから、テキストアーカイブズを書記行為の再現系として扱うことが、何如なるものであるかを考えてみよう。書記行為の再現系は、上で述べた書記行為の意味『Φ』を記述するものではなく、そのインスタンスを集めたもの、即ち、ある特定の文献(書記行為の再現系の対象を仮にこう呼ぶ)に関係する書記行為のコーパスのようなものになる。書記行為の再現系を構築するには、以下のような問題点を明かにする必要がある。

- 発話行為に発話内容が付随するように、書記行為には対象とする文献が扱う対象世界の記述が付随するかどうか？
- 書記行為に関わるオブジェクト、例えば、言語単位としての「文、語、文字」等を同定するには、他の意味論を必要とするのか？ 或いはそれが不要であるほど、書記行為理論の記述力が高い必要があるか？
- 書記言語の場合は作者と読み手の言語が異なる場合があり、書記行為を考慮すると、行為者と解釈者の言語の違いも扱う必要がある。
- 書記行為の再現は編集文献学の立場に依存するか？ 文献[14]では、編集文献学者の様々な立場が言及されている。例えば、英米人(折衷)的編集者とヨーロッパ人(史的批判)的編集者の立場等。これら編集文献学者の見解に独立な意味理論の形式化は可能であるか？²

ここで述べた「書記行為の再現系」についての問題を議論するために、以下では一般のアーカイブズ論から再考していこう。

²この独立性は、具体的な見解を表現すべき意味論が、その見解に対して独立に形式化できることを要請するのであり、構築される個々のテキストアーカイブズが編集文献学者の見解を含まないことを意味しない。

³文献[2]では、アーカイブズ構築にとって相応しくない「自然言語は表記的体系でない」という事実を述べた。ここでは言語記号に伴う他の種類の困難について述べていく。

⁴本稿の目的は言語哲学的な問題を議論することではなく、テキストアーカイブズの可能性を検討することなので、その詳細には立ち入らない。詳しくは、例えば文献[12]を参照。

⁵Fregeの意味論だけを取り上げることで、ここでの議論の一般性を失うことはない。それは多くの指示理論が指示機能を考える上で、記号の存在を前提としているためである。これについては次の小節で議論する。

4.2 指示機能の再現としてのアーカイブズ

文献[2]では、アーカイブズを「指示機能の再現」を行なう「記号体系」として規定した。そこで使用した「記号体系」は、様々な領域におけるアーカイブズを統一的な枠組みにおいて、理論的に理解するために導入されている。そのため各々の領域でのアーカイブズの性質を詳細に議論するためには、道具として弱い面がある。即ち、各領域を議論するためには「記号体系」を詳細化する必要がある。

テキストアーカイブズに対して、その「記号体系」の詳細化とこの規定の意味について考えてみよう。テキストアーカイブズの場合、「記号図式」に含まれる言語記号を決めるのは言語体系であり、テキストを再現するテキストアーカイブズが、言語テキストから意味領域への指示を決定している。テキストアーカイブズの構築とは、端的に言ってしまえば、この言語記号と指示機能を決定することであると言えるが、これは何如にして可能であろうか？³

4.3 指示理論

まず指示機能について議論しよう。テキストアーカイブズを議論する上で、言語記号とその指示作用についての考察を外すことはできない。言語と世界の関係、即ち、言語表現と指示対象との関係をどのように理論化するかということが問題となる⁴。ここでは指示理論として、現代の言語哲学に大きな影響を持つG. Fregeの意味論について議論しよう⁵。Fregeの意味論では、意味を「意義」と「指示対象」の二つに分け、「意義」によって記号の指示するものを限定する。

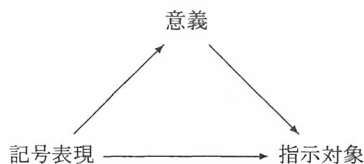


図2. 記号とその指示

例えば、概念に対しては、意義を述語関数的に理論化し、その意義を媒介にして、記号表現が指示する対

象を限定する。これは B. Russell が提出した指示の記述理論において、意義を記述として与えるのと同様な働きとみることができる。また、言語行為論では、その時々発話における文脈が、指示を決める意義の役割を果たしている。

これまで見てきた指示理論では、記号表現を指示対象に結びつけるために意義、或いはそれと同様の機能を使用した。しかし、言語記号の場合、この図式には以下のような困難が伴う。構造言語学で扱われる言語記号は、記号表現 (シニフィアン) と記号内容 (シニフィエ) からなり、その二面性を分離することのできないものである。この言語記号を先程の図式で解釈するには、意義を記号内容として考えるほかないが、この二つは質的に異なるものである。これについて文献 [5] は以下のように述べる⁶。

「指向対象」という発想は、言語記号がラングのなかにシニフィアンとシニフィエの結合体として配列されていることを前提とする限り、その結合体との関係を厳密に規定することは不可能なものである。…これらの関係はラングとパロールの区別の外で考えられている。(文献 [5] 36 頁)

この議論は言語行為理論にも当て嵌まり、更に本稿のテーマである書記行為理論を、状況意味論のような形式で扱うことにも向けられる⁷。それではこの言語と世界をどのよう記述すべきなのか、これについて以下で述べる。

5 Bergson と前田の言語論

文献 [5] では、H.-L. Bergson の言語論を手掛りとして、独自の言語論を展開する。ここでは、様々な書記行為を統一的に理解するための前提として、以下の議論に必要な範囲で、文献 [5] の言語論について述べる。

5.1 Bergson の記憶モデル

Bergson の言語論は「知覚の再認回路」と「記憶の円錐モデル」という二つのモデルと、その相互作用によって説明される。まず「知覚の再認回路」から説明する。

O は知覚の対象であり、回路 A, B, C, D は O を含みながら、拡張、増大する回想の努力を表わしている。最も狭い円環 A は、 O に対して自動的に演じられる回想、つまり身体の直接的な反応を示すと言える。円環の拡張は、対象を「より深い」記憶、ますますニュアンスを増大させる過去の諸水準のなかに置き直していく。(文献 [5] 71 頁)

また、これらの知覚の再認に対応して、様々な実在のレベルが経験される。

知覚されたものの再認において、すべての過去はいつでもそこに現存している。ただ回想が生み出す回路の伸縮は無限であり、そのことから、知覚される事物は無数に反復するさまざまな「深さ」を持つことになる。 B', C', D' が示しているものは、伸縮する過去に対応したそのような実在の深さである。(文献 [5] 72 頁)

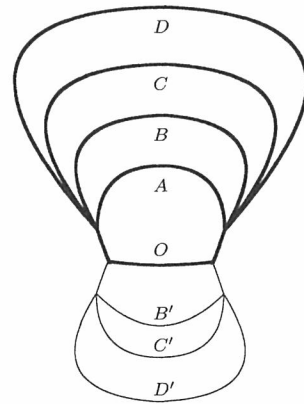


図 3. 知覚の再認回路⁸

このような説明では分かり難いが、文献 [5] では以下の例によって、この事態を説明している。

私がある声の連続をレコードで聞くととき、それをたんに人の声と認めるか、フランス語だとわかるか、あるいはしかじかの意味の文章だと了解するか、またそれが

⁶この引用は Frege の意味論について述べられたものではなく、Ogden, Richards の「意味の三角形」について述べられたものである。

⁷ここでの議論は、文献 [14] で提出された書記行為理論に向けてなされている訳ではない。

⁸文献 [9] 邦訳 121 頁より引用。但し、描画の都合で点線を細線に、円弧を潰れたものとして描いた。

ある詩人のあの詩だと気づくか、さらに誰それによるあのときの朗読だと想起こすか、こういった再認の複数の水準は、知覚される声を異なる広がり、の再認回路に置くことから生じてくるだろう。(文献[5] 71 頁)

この例は奇しくも知覚の対象として、レコードという記録媒体が使用されている。記憶の再認回路に引がかかるためには、記録媒体に記録されたものが、その再認回路が要求するものを記録していなければならぬであろう。この例の場合、音質が悪ければ人の声と認識されないかもしれないし、文章の意味が了解できないかもしれない。また、誰それの朗読だと気付くこともないかもしれない。もちろん、記録されているものと想起の間にはある種の差異があることも事実である。

このような知覚対象の再認に対応して、それが直ちに行為の出現に転位する。例えば、聴取することが発声に転位するように。それが以下の「記憶の円錐モデル」である。

先端 S は私の身体が現在の行動において持つ実際の知覚を表わし、それが接する平面は行動をととして私が捉えうる特定の世界の部分である。… この知覚はもはやたんなる再認ではなく、一定の持続を含みつつ現働化されていく有用な記憶 = 行動そのものだろう。これに対して、底面 AB は、いまだ収縮を起こさない不動の過去の全体を表わしている。

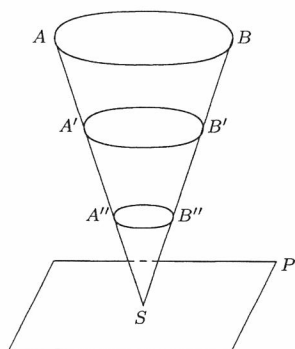


図4. 記憶の円錐モデル⁹

この円錐の中の流れとして、「一般概念」が現われる。Bergsonはこの「一般概念」として「語」を捉える。

⁹文献[9] 邦訳 183 頁より引用。

「一般観念は、頂点 S と底面とのあいだを絶えず浮動する」流れであり、それは頂点 S において「発せられる語」ともなるが、底面 AB では「無数の個的イマージュ」に分散して、観念としての統一をほとんど霧消させさえもする。(文献[5] 84 頁)

記憶の円錐の図は、「語の発音」と「言表行為」との関係を、…説明している。たとえば、かりに横断面 $A''B''$ を分節言語と呼ばれる収縮した記憶の一水準だと見なすなら、たんなる語の発音はこの水準を S 点で示される感覚 = 運動機構へと現働化させるだけでよい。…さまざまな言表行為の各性質により、それらが現働化する過去の水準は異なっている。異ならないのは、それらのいずれれもがラングの横断面 $A''B''$ を円錐の先に含んでいることである(文献[5] 85 頁)

「知覚の再認回路」を用いることで、語の再認による言述の了解を説明し、「記憶の円錐モデル」を用いることで、その言表行為について説明するのが、文献[5]で述べる Bergson の言語論である。

5.2 前田の言語モデル

しかし、文献[5]では、上で述べた Bergson のモデルにおいては、言語特有の在り方を説明できないとする。即ち、言語を記憶の一水準とし、言葉の意味を発声や聴取の運動への身体的な運動として、記憶の円錐モデルにおける収縮として説明する方法では、言語現象の特殊性を説明することができない。まず、Bergson の「一般観念」は生の功利的な面から生まれるが、「言語」にはそのような功利性から独立した面を持つ。従って、以下に引用するように、「言語」は「精神」「物体」と異なる第三の潜在的な存在の領域を形作る。

「意味」は身体の行動と同じ領域に存在しない。(文献[5] 209 頁)

しかし、言語の領域は記憶の領域と独立ではなく、後者の領域における運動の言語的な転換を含んでいる。これが運動図式による現働化に対して、第二の現働化と潜在化の働きである。

6 テクストアーカイブズ構築に向けて

本節では、テキストアーカイブズと Bergson、及び前田の言語モデルとの関連を述べ、テキストアーカイブズ構築に向けて、今後何を検討すべきかを議論する。

6.1 書記行為における再認回路

テキストアーカイブズを書記行為の再現系として扱うために、書記行為を Bergson の言語モデルで考えてみよう。書記行為に関わる再認回路にも様々な水準がある。例えば、木ぎれに図柄があって、そこにある図柄が文字であると認めるか、漢字であると分かるか、或いはその文字が篆書であると分かるか、文章が書きつけてあると認めるか、どの地方のどの時代の文章と分かるか、また、我々の知っているどの文献の一部らしい、或いはその内容が理解できる等々、様々なものが回路として働くであろう。

書記言語の場合は音声言語の場合と同じように、回路が単純にネスト構造をなしているかは明らかではないが、このような回路には、言語構造の他に色々なものが考えられる。この回路の理論化には、おそらく文献学、人類学、地理学等の様々な学問を必要とするであろう¹⁰。

6.2 テクストアーカイブズ構築の条件

書記行為のための再認回路を理論化するために、ここでは意味理論を構築するという方向で考察しよう。この意味理論の構築は、言語哲学で扱う一般の意味理論とは異なり、以下にあるようなテキストアーカイブズ固有の条件を検討しなければならない。

1. 対象領域によって、真理条件の意味論であるか、正当化可能性意味論であるかを選択する。
2. 根元的解釈 radical interpretation¹¹を前提とする。

¹⁰ 実はこのことは書記言語特有のことではなく、行為における再認回路を問題とする場合には音声言語にも当て嵌まる。

¹¹ 例えば、文献 [10] を参照。

¹² 古典作品を扱ったり、異なる言語を扱うなどの制約から帰結するが、これは対象言語の問題ではなく、原理的な問題である。

¹³ 意味理論の構成に「根元的解釈」が関わるということは、文献 [13] が様々な学問を翻訳と見做すことと対照して、興味深い事実である。

¹⁴ 例えば、「宵の明星は明けの明星である。」という文の場合、「宵の明星」「明けの明星」の「意義」を与えているのは、これらの語を概念化している理論（日常の常識等）であり、「指示対象」を与えているのは「金星」を概念化している理論（例えば、天文学）というように、二つの理論が関与している。

¹⁵ 例えば、「新しいテキストは、その語彙テキストがソーステキストの語彙テキストと一致する部分では、ソーステキストと同一であるべきだ。」([14] 邦訳 14 頁) という表現が見うけられる。

3. 対象領域によって、全体論的な言語観をとるか、分子論的な言語観をとるかを選択する。

4. 語の指示理論の他に、文字の意味理論を含む。

1 は文献の内容から構成できるテキスト空間の性質から帰結するであろう。また、誰がどのような状況で話したのか、書いたのかのかというオーソリティやその混合の問題も含めなければならないため、正当化可能性の混合についても考える必要がある。2 は書記行為の行為者と解釈者の間では同じ言語能力を仮定できない¹²ことから帰結する。「根元的解釈」とは、整合性を持つ解釈を目指して、解釈を漸次構築していく過程である¹³。3 は各々の文を理解するために決定的な言語断片があるかどうかで決まる。分子論的とはそのような言語断片がある場合、全体論的とはそのような言語断片がない場合で、文の理解が理論全体に依存している場合を言う。4 は漢字圏における言語を扱う上においては必須である。

再認回路を意味理論として捉える場合には、節 4.3 で述べた Frege による意味の二つの区別、即ち「意義」と「指示対象」との区別は、この枠組みにおいては意味の本質的差異であるとは言えなくなる。この区別は志向性を評価するときの「理論の違い」として捉えることができるからである。例えば、ある文を評価することは、文を構成するときの理論が意義を与え、文を検証するときの理論が指示対象を与えることで成り立つと解釈できる¹⁴。これは正当化可能性理論に二種の理論を持ち込んだことに相当する。

6.3 漢字圏におけるテキストの表現

文献 [14] は編集文献学の立場から、文献の電子的再現について周到な議論を展開している。転写についても文献学者らしい着眼点を見せているのではあるが、「語彙テキスト」に関して、それを再現する媒体に無頓着である印象を受ける¹⁵。転写の問題も含めて、漢字圏のテキスト表現では検討すべき部分が多数ある。

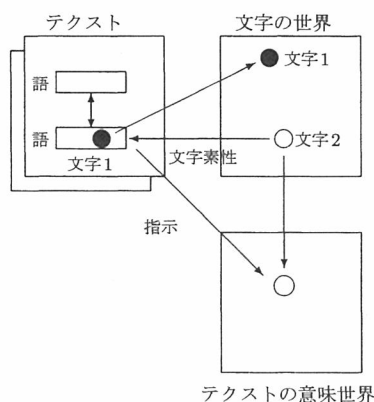


図5. 文字とテキスト

図5は文献[4]で述べた、文字の意味論と語の指示理論との関連を示す。「文」「語」の他に「文字」に対しても意味論的な循環があることを述べた。「テキスト」は「文字」の素性¹⁶を与える理論の基になるテキストで、「テキストの意味空間」はそのテキストから構成された世界である。しかし、これはある種の指示理論を基に概念化されている。文献[4]でも述べたが、文字を認識するための様々な回路を理論化する必要がある。

6.4 知覚の拡大とアーカイブズ論

文献[2]では、「アーカイブズは記号体系である」という提唱を提出し、それに基づいて、アーカイブズとして扱えるための「記号体系」の条件を議論した。しかし、その条件を充す「記号体系」が全てアーカイブズとして扱えるという訳ではない。そこでは「いつアーカイブズなのか？」という問題を提出し、W. Benjaminによる芸術論において取り上げられた、「技術と知覚」という点から試論を述べた。

本稿で議論したBergsonの記憶モデルでは、芸術を「知覚の拡大」として捉える。「知覚の拡大」とは、生の功利性の原理から知覚を解放することであり、このような「知覚の拡大」は芸術において実現されているというものである¹⁷。「知覚の拡大」というモデルは「いつアーカイブズなのか？」という問題を議論するための手段を与える可能性がある。

¹⁶文字概念を素性の束で表現するという点に関しては、文献[6][7]を参照してほしい。

¹⁷これについては文献[5]の批判を参照。

¹⁸「反復可能性」については改めて検討すべき点が多々ある。例えば、文献[11]を参照。

7 おわりに

本稿は文献[14]で提出された書記行為を手掛かりに、テキストアーカイブズの基礎理論を構築するために議論すべき事柄を提出した。

Bergson、或いは前田の言語論を基本的な大枠として採用し、言語を記憶の一つの水準であるとするならば、書記行為に関する様々な認識は、それを了解するための意味理論によって定式化される。そのとき書記行為の意味は、言述を構成する理論と意味の正当化を行なう理論という、二つの理論の関係によって記述される。更にこれらの理論は「根元的解釈」によって結び合わされる。このような枠組みによって、テキストアーカイブズを構築するための理論を詳細化していくことについては、今後の大きな課題である。

前世紀において、言語学は「言語」という固有の対象を確立するために、文献学からの独立が必要であったが、テキストアーカイブズを構築するための基礎理論は、その言語研究に再び文献学の助けを必要としている。文献学は書記行為を通して、まさにテキストの解釈、生成に関わる事象を扱う学問であるからである。

本稿のアプローチは書記行為に注目することによって、結局、テキストアーカイブズが対象とするオブジェクトが何如に発ち現われるかに注目することになった。これは人文情報学の新たな方法論を示唆するであろう。「ディープな人文情報学」としての一般キャラクター論[1]と、その問題意識を共有するものがあると言える。

最後に本稿は文献[14]に示唆されたものであるが、「表現が反復可能でなければ、意味作用を持つことはできない」¹⁸とすると、文献[14]の書記行為として反復できないテキストは、どのようにナレッジサイトとして構築され、再現されるのであろうか？このような疑問に答えようとする試みが本稿の端緒になっている。これはBergsonが区別した反復の二つの区別に深い関わりがあるであろうか、今後の課題としたい。

謝辞 「ディープな人文情報学」の立場を提唱されている先生方、特に守岡知彦さん、師茂樹さんには、日頃より様々な議論を通して啓発していただいていることに感謝いたします。文献[1]の総括で師茂樹さんが、人文情報学において方法論やモデルに対する省察が不足していることを指摘し、「コンピュータを用いることで研究者が暗黙のうちに前

提している様々な概念やモデルについて省察する機会が増えるはずであり、それこそが人文学においてコンピュータを用いる最大のメリットである」と主張されています。本稿もそれに資することがあれば願う次第です。概要論文に対して査読頂いたお二人の方からは有益なコメントを頂戴しました。その他、多くの助言、助力を賜った多くの方々に感謝いたします。最後にいつも支えてくれる妻留美と娘に感謝します。

参考文献

- [1] 京都大学 21 世紀 COE プログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」：「人文情報学シンポジウム ― キャラクター・データベース・共同行為 ―」報告書, 京都大学人文科学研究所, 2007.
- [2] 白須裕之: 記号機能としてのアーカイブズ, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, 2008.
- [3] 白須裕之: 文字の指示概念に関する試論, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, 2008.
- [4] 白須裕之: テキストアーカイブズにおける文字概念について, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, 2009.
- [5] 前田英樹: 言語の闇をぬけて, 書肆山田, 1994.
- [6] 守岡知彦: 文字オントロジーに基づく文字処理について, 情報処理学会研究報告, 2006-CH-72, 2006.
- [7] 守岡知彦, 師茂樹: 文字素性に基づく文字処理, 情報処理学会研究報告, 2004-CH-62, 2004.
- [8] J. Barwise, J. Perry: *Situations and Attitudes*, MIT Press, 1983. (邦訳 土屋俊他訳: 状況と態度, 産業図書, 1992.)
- [9] H. Bergson: *Matière et mémoire*, 1896. (邦訳 田島節夫訳: 物質と記憶, ベルクソン全集 2, 白水社, 2001.)
- [10] D. Davidson: *Inquiries into Truth and Interpretation*, 2nd ed., Oxford University Press, 2001. (初版の抄訳: 野本和幸他訳: 真理と解釈, 勁草書房, 1991.)
- [11] J. Derrida: *Limited Inc. abc ...* in *GLYPH 2*, the Johns Hopkins University Press, 1977. (邦訳 高橋哲哉, 増田一夫訳: 有限責任会社 abc, 「デリダ ― 言語行為とコミュニケーション」所収, 青土社, 1988.)
- [12] W.G. Lycan: *Philosophy of Language — A Contemporary Introduction*, Routledge, 1999. (邦訳 荒磯敏文他: 言語哲学, 勁草書房, 2005.)
- [13] G. Mounin: *Les problèmes théoriques de la traduction*, Gallimard, 1963. (邦訳 伊藤晃他: 翻訳の理論, 朝日出版社, 1980.)
- [14] P. Shillingsburg: *From Gutenberg to Google — Electronic Representations of Literary Texts*, Cambridge University Press, 2006. (邦訳 明星聖子, 大久保譲, 神崎正英訳: グーテンベルクからグーグルへ ― 文学テキストのデジタル化と編集文献学, 慶應義塾大学出版会, 2009.)